美麻の文化

美麻の民話

静御前伝説

美麻の伝説を知ることによって、美麻のことを深く知ることができるので、美麻にまつわる民話を読んでみた。読んだ民話の本は、『語り継ぐ大町の伝説』『金田国武　民話の世界』『安曇野大町の民話』の3冊だ。また、読んだ民話の中から一つ選び、小さい子にもわかるような簡単な日本語で書き直した。

①

昔の美麻村の大塩は、静御前が亡くなった所とされている。

②

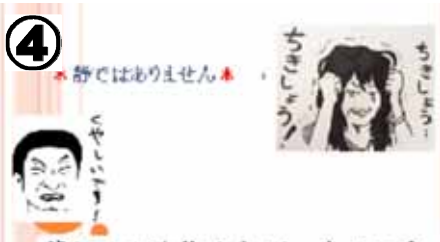
さて、静御前が、源義経にあこがれて東北の奥州へ行く途中、道を聞いたところ、聞かれた人が奥州（現在の福島・宮城・岩手・青森の4県と秋田県の一部）を大塩と聞き間違えて美麻村の大塩を教えた。

③

そうとも知らない静御前は、大町から鷹狩山を越えて大塩へ向かった。（徒歩一時間十分）けれど、大塩も遠かった。

「奥州はまだ見えぬか…」

④



静はとても悔やしがったという。そこを今でも「メイノ原」といっている。

⑤

ようやく着いた大塩だったが、そこが奥州でなかったことを知り、静はそれまで突いてきた杖にしがみついて大泣きした。

⑥

その杖が根付いたとされるのが、大塩の南にある「静の桜」という古い木である。

⑦

この桜は「みつめ桜」ともいわれるが、正しくはイヌザクラで、木のまわり3メートル、高さ20メートルはある。樹齢（木の年齢）は1000年とも言われている古い木だ。

⑧

なお、この木を傷つけたり枝を折ったりすると不幸なことが起こると言われているが、それは、この地域の人たちの昔に寄せる熱い思いが、あるからであろう。

＊「語り継ぐ大町の伝説」を参考に作成しました

美麻に伝わる民話

いずな使い

むかぁしむかし、このへんの村にはイズナっていうものがいて、人に憑いては悪さをして困ったそうな。悪い病気をはやらせたり、方角を狂わせてどこか遠い遠いところに連れて行ってしまったり、急に訳のわからぬことをしゃべらせたり、何しろ普通では考えられないようなことを耳の穴から吹き込みだんだん青ざめた袋小道へ追い込んでいき、ついついきを狂わせて命の明かりをけしてしまうこともあったそうな。

ところがこのイズナがどこに住んでいるのか、どんなものかわからないもので殺すわけにもいかず、誠にしまつにおえないやつだったそうな。

小さなネズミほどの狐に似ているやつだといったり、イズナは山猫のことだといったり、何しろすばしっこいやつなので、なかなかその正体を現すことが無かっただそうな。

ところがこのイズナよりなおしまつのわるいのがイズナ使いといって、自分の思い通りにイズナを使ってわるさをするやつだった。むかぁしむかし、戸隠山の奥でイズナ使いの修行をしたいという一人者の坊様が二重村の小藤に住んでいたそうな。なにしろ人が「ああだ」といえば「いんね、こうだ」という性質で、「みんな総出で、大藤から小藤へぬける道ももう少し広げて、歩きいいようにしるじゃあねぇか」といえば「道を広げりゃあその分だけ畑がつぶれて、作物ぁ作れなくなる。そんなことぁだめなことだ」ぷいっと横に向く始末「それにしてもこんな狭い道じゃあ、夜なんかあぶなくて通れねぇぞ。ほかのみんないいっていうだで、思い切ってやっちまうじゃあねえか」

そうだそうだと言って仕事を始めると「やや、俺ぁの鍬ぁ土いくり込んでしまってはられね」「いて、いてて俺の体ぁ金縛りになってしまった。畜生、あいつ、またイズナを使ってこんな嫌がらせをやっただな」そんなことが度重なるので、イズナ使いはだんだんみんなから相手にされないようになっただと。そうすると、また若い衆がお祭りの相談にも行かないと言って獅子舞の最中に笛や太鼓の音を止めてしまったり、灯ろうの明かりを消してしまうような嫌がらせもやっただと。

それどころか、イズナを使って月夜の晩にふらふらっと村の娘をさそいだし、次から次と思い通りに弄んだので「もうかんべんならねぇ」と村の衆はかんかんに怒って、ある晩村一番きりょう良しの娘を使って酒を勧め、酔い潰れたところを丸太ん棒で一騎打ちにしてしまったと。

「ああこれで安心だわい」村のみんながそう思って胸を撫で下ろしたのもつかの間、イズナ使いはいなくなっても、使っていたイズナはまだまだ生き残っていて、それから後もちょいちょい村の衆に憑いては悪さをしてこまったと。

そこで戸隠の行者さまに頼んで、イズナを桜の大木の上に追い上げ、松葉の煙でいぶし、桜の幹の中に封じ込めてしまったそうな。

それではじめてこの村に昔の平和が帰ってきたのだそうな。

民話を調べてみて

いろいろ民話や昔に関係する本をたくさん読んだ。とても大変だったが、一つ一つに独特のおもしろみがあっておもしろかった。どの民話を使うかとても迷い、最終的には美麻のみんなは聞いたことがあるだろう、静御前伝説を選んだ。難しい漢字や意味を子供にも分かり易くするため、漢字の意味を一つ一つ調べたのがとても苦労した。完成した文を読んでもらってどこの意味がまだ難しいのか、「もっとこんな風にしたらいいよ」などのアドバイスももらえて、とても助かった。後から読んでみてだいぶ話からずれていたので、リスタートしたこともあった。完成してそれをパワーポイントにするのも大変だった。

全てが完成して振り返るとこの作業だけで、昔の美麻がどんなのかわかった気がした。

（貫太　画）